

先秦貨幣に初めて接する者にとつても極めて便利な書である。

二〇〇一年六月 北京 紫禁城出版社
B5版 目次・圖表目錄二頁 前言四頁
本文・文獻目錄四二五頁

Dorothy Ko 著

*Every Step a Lotus:
Shoes for Bound Feet*

小野和子

美しい本である。それは纏足の靴(ロクタス・シューズ)そのものの美しさだが、同時に、そこに女性の美への追求を讀みとろうとした著者の發見した美しさでもある。數十點に及ぶ色彩豊かな圖版の頁を繰りながら、私にとって、今まで歴史は、漢文文獻と同様モノクロの世界だった、少なくとも自覺的にカラーの存在を考えてみたことがなかった、とあらためて思った。

著者ドロシー・コウは、アメリカのコンピア大學バーナードカレッジの教授で、先年、カナダのバタ・靴博物館主催の「歩

歩 蓮華を生ず——清末中國における女性の生活と靴」という展覽會の企画に參畫し、同博物館との連携のもとに本書の刊行に至った。したがって本書には、この時の展示品が多数収録されているが、この外にも、海外の華僑のなかに保存された纏足の習慣や關係資料に據っている點が特徴的だ。これら資料の収集時期から考えれば、とりわけアートとしての價值をもつ靴が重點的に収集されたことが想像できる。

纏足については、近年いくつかの專著や論文が出ている。私自身も過去に女性史を書くなかで何度か觸れたことがあるが、私がいメージしてきたのは、ゆがめられた女性の身體の苦痛であり、男性による抑壓の象徴としての纏足であつて、その上を覆う小さな刺繡の靴は、見、かつ語るだに値しない薄汚れたぼろ布に過ぎなかつた。このような纏足についての既成觀念は、たんに學界ばかりでなく、廣く一般の人々のなかにも牢固として存在する。それはしばしば、遅れた中國、非文明の中國の象徴であつて、不纏足運動こそが女性史における近代の開幕を告げるものに外ならなかつた。

このような見方に對して、著者はこれま

でも深い疑念を呈して來た。著書『*Teachers of the Inner Chambers: Women and Culture in Seventeenth-Century China*』(Stanford Univ. Press 1984)「中國の衣服と體のイメージ——一六世紀から一九世紀におけるヨーロッパ人の旅行記から」(『論集中國女性史』吉川弘文館、一九九九)などである。著者によれば、上述のような纏足のイメージが形成されたのは、中國の近代になつてのことであつて、外國人が壓倒的な優位に立つていた。彼らは「自らの近代を完成するために他者としての中國」を必要としたのであつて、纏足は「中國文化の恥部」とする近代の價值觀が形成されたのはこのような状況においてだった。本書は、その既成觀念を取り拂つて、當時の女性自身の詩文を讀み込み、彼女たちの目線に立ちながら、纏足の意味を根底的に問い直そうとする、大膽かつ野心的な書物である。以下、各章ごとにその内容を紹介していく。

第一章は纏足の「起源」である。

ここでは、福建・江西・浙江の南宋時代の墓から出土した靴に注目する。このうち

福建と浙江の二つの墓から發掘された靴はたしかに小さかった（江西は普通よりやや小さい程度）。これらは南宋時代ですでに小さな足が上層官僚の家庭に行われていたという動かぬ證據である。これらの物的證據を前にして著者の想像力は大きく廣がる。その背景には小さな足——靴への憧れが廣く存在したはずだ。

ここで取り上げられるのが、『西陽雜俎』に出る葉限という少女の物語である。これが、當時世界に流布したシンデレラ物語の中國版であることは夙に指摘される所だが、ここには、失った靴が普通より一インチ小さくて、彼女以外の誰も履くことができなかった、というストーリーがある。そればかりではない。著者は、少女が、何でも望みを叶えてくれる鯉を飼っていたことに注目する。大きくなる鯉は、大きくなる足への恐れを暗示する。この物語は中國南部に流布していたが、この時期、今日、フェミニズムでいう所の「シンデレラ・コンプレックス」¹¹他者依存の願望が成立しつづつあったと推測する。

或いはまた女性の足がどのように人びとの眼を惹いたか、という點で、曹植の「洛

神賦」、韓偓の「靴への賛歌」（屐子）、溫庭筠の「錦の靴のラプソディ」（錦鞋賦）などを引用する。これらは直接に纏足の證據になるものではないが、ここにはあきらかに女性の身體の動き、とくに足もとへの注目があり、それはまた足の白い肌を連想することへとつながる。そこに足にまつわる一種のエロチシズムが存在したことはた

しかであり、このような文化的價值観が、纏足という社會的慣習を生み出す背景にあった。

さらに纏足には、中央アジアやインドから中國に流入したダンス文化が深く關與している。一つはブーツを履いたダンサーがテンポの早い音楽に合わせてステップを踏むミリタリー・ダンス。このダンスの系統は、中國では廢れてしまったが、性的或いは女性的な感覺を持ち込んだ。もう一つはインドの影響をうけて蓮の花咲く池を思わせるスロー・テンポのダンス。彼女たちが履くのはつま先が上を向いて雲のようになつたダンス靴であつて、すり足でゆるゆると歩く。後者の系統のダンスを代表するのが楊貴妃の霓裳羽衣の舞であつた。彼女は纏足をしていなかったが、ふくよかな楊貴

妃の身體美とデリケートな足の動きは、死後、女性たちの憧れになつた。

纏足の創始者のように傳えられる宵娘が登場したのはこうしたダンス文化の流行するなかであつた。宵娘は實在の人物ではなかつたかも知れないが、當時、南唐の宮廷にいた多くのダンシング・ガールを代表するものであつたことは間違いない。彼女は大きな蓮の舞臺で足を新月狀に縛つて踊り、その優美な姿が愛でられた。

つまり著者によれば、纏足の習慣は、何世紀もの歳月をかけて育まれたもので、ダンサーたちの履いた靴と深い關係をもつていた。このように著者は、モノとしての纏足の靴に局限するのではなく、その文化的な背景、とりわけ人々の身體觀などの考察を通じて纏足成立の長い過程を解き明かそうとしている。

第二章は「縛つていた布」で、纏足の儀式と技術について述べる。

ではなぜ纏足が家庭にまで入つていったのか。この章では纏足の具體的な考察に先だつて、纏足の女性たちが暮らした家についての敘述がなされる。本書には、全體の

敘述とは別に、ページ見開きのコラムで「儒教の家族観」「家族の居住空間」など圖版入りの記述があり、これがまたなかなか興味深い。當時、文人の家庭では、女性たちは家で父親からそれにふさわしい教育を受け、才能を發展させた。結婚に際しては、纏足が条件となったが、それは纏足がセクシュアリティの象徴だったからではなく、謙讓と道徳性の象徴とされたからだ。

家が豊かであれば、女性は結婚に際して寶石など相應の財産を得、やがては婚家の主婦となつて、家計の象徴としての鍵を握る。家族制度は儒教で重要な価値をもつものだが、彼女たちはその世界をよりよきものにするために専念した。

纏足にはさまざまな儀式がある。それは女性の手によつて行われる女性のコミュニケーションへの参加を意味するものであり、男性からは見えない世界だった。準備は周到に行われ、蓮のうでなに座る観音への祈りが捧げられる。母親たちは、これに娘の清純と纏足の成功を祈つた。

娘たちは母親から最初の纏足靴を贈られるとともに、よき女性となるための必要な技術、裁縫や靴づくりなどを身につける。

靴はまた實家や友人たちへの贈り物にも用いられ、詩などを縫い込んで、手紙に代わる意思の傳達手段ともなった。

女性にとつて最後の靴づくりは、自分が死んだときに履く死に裝束のための靴である。木綿の黄色や紺などの、色を抑えた死者の靴は、私のはじめて目にするものだった。

第三章は、靴づくりを中心に「女性の勞働」について述べる。

古來、女性とシルク文化とは相互に深い關係をもつていた。器用な指先と洗練された技術は、上品な女性の仕事となり、國內だけでなく海外にも輸出されて、高い價值を生んだ。女性は手と身體を使って家族と世界のために大いなる價值を創造したのだ。彼女たちは乳兒を育てるように細心の注意を拂つて蠶のさなぎを育てたのであつて、シルク文化と母性の間には類似がある。

一方、木綿は農民の家で紡がれる簡單な織物だった。とくに清朝になつて以後、木綿普及の政策がとられ、貧しい農民の娘たちもお金を稼ぐことが可能になった。その結果、畑仕事は男兄弟に譲られ、彼女たちは

も纏足をするようになった、という。纏足の起源の確かな證據を二三世紀に見る著者も、纏足が下層階級に擴大するのはむしろ近代の前夜だ、と考える點が新しい。纏足は、女性のステータス、尊嚴、女性性の象徴だったが、履き手のステータスは一九世紀になつて劇的に變つた。

ついで靴づくりのプロセスが提示され、女性の詩や靴づくりのテキストなども紹介されるが、ここではすべて割愛する。纏足とともに足を飾るレギンス、アンクレット、脚絆のような巻き布についても詳しい。

第四章は「靴は語る」であつて、靴と足の關係、靴の地方色について述べる。

この章では、靴を通じて、わたちの身體、夢、希望を探り、わたちもその一翼を擔つたはずの地方文化について語らせようとする。

興味深いのは、纏足によつて足がどのように變形したか、小さい足というのには實はトリックがあつて眼の錯覺が利用されていることを、ハワード・レヴィの研究によりながら詳細に檢證している點である。靴は魔術師であつて、錯覺によつて我々は實

際以上に足が小さい、と思ひこんでいる。

纏足の足は従来考えられてきた程、骨を破壊したわけではなかった。北方型の靴でも南方型の靴でも、足の容積をどのようにして小さく見せるか、さまざま工夫が凝らしてある。しかも、飾り立てたつま先と足首の前に視線が集まって後部は見えにくい。女性たちは靴を錯覚の道具として利用したのだ。「纏足は自然ではなく文化、或いは靴は文化的工芸品としてあって、それが纏足の魅力であり意義である。靴のスペックタクルと隠れた足の間のダイナミックな関係」が好奇の眼を惹きつけることに成功した、という。

さらに、靴の上におかれた刺繍の数々は、民族藝術、社會習俗という、より大きな世界について物語る。さまざまなモチーフが、これを履く人の多産、長壽、幸福、富、成功を願う。それは贈る側の願望をも示す。單純なものもあれば、シンボルを通じて物語の全體を示唆するものもある。それらは地方の藝術的傳統と地方文化を考える上で不可欠の一構成部分であった。

第五章「新しい世界」は近代に入つての纏

足靴について述べる。

一九世紀後半、西洋人によつて裸の足がカメラのレンズを通して寫されることになった。祕匿の神秘性はなくなり、女性が育んできた知識・労働・儀式・技術の意味も失われた。變法運動のなかで、纏足反對は聲高く叫ばれたが、しかしそれは女性の行動や價值觀を變えるには至らなかつた。民國になつても纏足は續き、内陸部の一部では革命後の五〇年代まで残つた。なぜ女性たちはすぐに纏足をほどこうとしなかつたのか。「多くの場合、女性たちは國家がその私的生活に侵入すること、或いは外部のものが自らの身體のありように指示を與えること」に抗議したという。これを女性の身體の自主權への侵入としてとらえる視點はやはり今日の女性學による解釋であろう。纏足の廢止が時代の流れになつたときも、彼女たちは新しい狀況に柔軟に適應し、畑や工場で働いた。運動や政策によつて彼女たちが一齊に解放されたのではなく、女性たちが自分たちのやり方で時代に適應していったという著者の立場が鮮明だ。

タイトルが示すように、著者は足から少

しばかり視點をずらして、ロータス・シューズを通じて纏足に迫つた。さらに女性の身體へ、それに向けられる人々のまなざし、家という空間のなかでの女性へ、と視點を廣げた。そして僅かに残つた靴の數々を考察することを通じて、工藝としての刺繡技術の高さとそれに籠められた女性の矜持を讀みとつた。そこから纏足の異なつた側面が見えたばかりでなく、女性の精神と文化、民間文化、地方文化へと独自の展望を開くことになつた。まだ假説として論じられているものもあり、今後の論證が必要になつてこよう。それはともかく、著者は、纏足研究の方法と全體的な構想を提示し、纏足の今まで見えなかつた側面をあざやかに切り取つてみせた。それは私とは異なつた評價のしかただったが、それにもかかわらず、歴史のなかに女性の主體と文化を見ようとする熱情に觸れ、著者の描く豊かな想像力の世界へと誘なわれた。一般讀者を對象に書かれた書物だが、研究者にも多くの示唆を與えることにならう。

Berkley and Los Angeles :

University of California press, 2001.

A 4 變型版 162pp.